国内研修成果報告書

研修テーマ：「買物公園から学ぶ今後の商店街のあり方」

[redacted]

研修場所：北海道旭川市 旭川平和通買物公園

研修期間：令和８年２月１日～令和８年２月３日

参加人数：５名

1.　本研修の目的

現在、私は東京都八王子市の銀座通り商店街で活動している。この商店街は人通りが少なく、来訪者の多くが高齢者であるという課題を抱えている。商店街の方々から「どうにか若い世代を呼び込みたい」と相談を受けたが、特徴的な大型店舗が少なく個人店が中心であるため、イベント開催などによる集客が求められていた。しかし、私たち自身にはイベント企画の経験がほとんどなかった。そこで、他地域の成功事例を学ぶため、視察を行うことにした。視察先として選んだのが、恒久的歩行者専用道路として全国的にも知られる「旭川平和通買物公園」である。本研修では、旭川平和通買物公園がどのように人を呼び込み、商店街としての魅力を高めてきたのかを取材し、その具体的な取り組みや工夫を八王子銀座通り商店街での活動に活かすことを目的とする。

2.　旭川平和通買物公園について

平和通買物公園（以下、買物公園）は、1972 年 6 月 1 日に誕生した日本で最初の歩行者専用道路であり、JR 旭川駅から八条通まで南北に約 1km 続き、幅約 20m のゆとりある大通りである。沿道には商業施設を中心とした民間の建物が立ち並び、戦前から旭川の中心的な通りとして市民に親しまれてきた歴史を持つ。こうした背景から、買物公園は長年にわたり地域の商業や文化を支える重要な空間として機能してきた。

その後、買物公園は車社会からの開放と自然との対話を目指し、2002 年に大規模な

全体リニューアル工事を実施した。歩行者空間として再整備されたことで、交通の要所である旭川駅の正面に位置する利便性と、広々とした空間を生かし、大規模なイベントや祭りが開催される場としても積極的に活用されるようになった。このように、買物公園は都市の玄関口としての役割と、市民が集い交流する公共空間としての役割を兼ね備えている。現在でも買物公園は「旭川の顔」として高い存在感を保ち続けており、地域内外から多くの人々が訪れる場所となっている。代表的なイベントには、「氷彫刻世界大会」や「北の恵み食べマルシェ」、「買物公園まつり・大道芸フェスティバル in あさひかわ」などがあり、これらの催しは買物公園の魅力を広く発信し、まちのにぎわいづくりに大きく貢献している。

3.　現地調査内容

2 月 1 日から 3 日にかけて調査を行った。1 日目と 3 日目には旭川平和通買物公園を実際に歩き、商店街や周辺環境を観察した。現地を訪れてまず印象に残ったのは、買物公園の持つ開放的な空間である。歩行者専用道路として整備されていることもあり、一般的にイメージされるアーケード型の商店街とは異なり、広々とした明るい雰囲気が感じられた。この点は、商店街に対して抱いていた「古い建物が並ぶ細い通り」という印象を良い意味で裏切るものであり、素直に魅力的だと感じた。

昼と夜の様子を比較すると、人通りに大きな差は見られなかった。駅へ向かう通り道として利用する人が多いことが理由として考えられる。夜間にはイルミネーション

が施され、フォトスポットも設置されており、観光客と思われる人々が写真を撮る姿も見られた。こうした仕掛けは、来訪者を増やす工夫として効果的に機能していると考えられる。また、一定間隔でベンチが配置されており、歩行者の滞在や休憩を意識した空間づくりが行われていることが分かった。

夜になると特に飲食店が賑わいを見せていた。個人店とチェーン店が共存している点は特に印象的で、チェーン店に人が集中するわけではなく、個人店にも一定の利用があるように見えた。商店街の入口付近にあるパン屋には多くの客が訪れており、若者の姿も見られたことから、幅広い年齢層が利用していることがうかがえた。一方で、時計店や靴店には客が少なく、小規模店舗が大型商業施設に比べて苦戦している様子も確認できた。これは、八王子銀座通り商店街でも同様の課題が見られることから、商店街で共通する悩みであると感じた。

歩いている中で、多くの銅像が設置されていることにも気づいた。猫や楽器を演奏する人物など、種類も豊富で、思わず写真を撮りたくなるような魅力があった。これらの存在は、買物公園が単なる通行空間ではなく、人々の交流や楽しみを生む場として機能していることを示している。また、雪遊びをする子どもや散歩を楽しむ住民の姿も見られ、買物公園が生活空間として地域に根付いていることを実感した。

4.　インタビュー内容

2月2日には、旭川平和通商店街復興組合・旭川平和通買物公園企画委員会の事務

局長である山岡揚子氏にインタビューを行った。買物公園では年間を通して多くのイベントが開催されており、食べ飲みマルシェや音楽大行進などの大規模イベントでは、商店街が人で埋まるほどの来訪者が集まるという。イベントの開催数の多さに驚くと同時に、こうした集客イベントを継続的に実施しなければ賑わいを維持することは難しいのだと感じた。

一見すると買物公園は人通りも多く、いわゆる商店街の衰退問題とは距離があるように思われる。しかし、インタビューを通して、買物公園にも課題が存在することが分かった。かつて交通の分岐点として栄えていた時代と比べると来訪者は減少しており、当時の賑わいを知る世代からは「昔のような活気を取り戻してほしい」という声も寄せられるという。ただし、現代では価値観や消費行動が大きく変化しており、過去の手法をそのまま繰り返しても効果は期待できない。現在のニーズに合わせた新しい取り組みが求められている。特に、イベントを開催して終わりにするのではなく、中心地から来訪者をどのように継続的に呼び込むかが重要な課題として挙げられた。また、現在は学生と共同でイベントを企画する取り組みは行っていないことも分かり、学生がまちづくりにどのように関わることができるのか、改めて考えるきっかけとなった。

インタビューの中で特に印象に残ったのは、「明日の買物公園を考える」という言葉である。まちの活性化のゴールとは何かという問いは、以前から抱いていた疑問でも

あった。単に人が集まれば活性化といえるのか、それとも地域住民が安心して暮らし続けられる環境をつくることなのか。その答えはまだ明確ではない。しかし、組合では会費を払う店舗に利益が還元されるよう、イベントの内容を工夫しているという話から、商店街にとって「持続可能な活性化」を実現するためには、イベントが店舗の利益につながる仕組みづくりが不可欠であることを強く感じた。

5.　考察・まとめ

本研修を通して、商店街の活性化にはまず「地域の特性を深く理解すること」が不可欠であると感じた。買物公園では、その場所ならではの魅力を生かしたイベントが数多く開催されており、こうした“ここでしか体験できない”企画が市内外からの来訪者を呼び込む仕組みになっている。このような独自性のある取り組みこそが、商店街の価値を高める重要な要素であると実感した。

また、活性化を「居場所づくり」という視点から捉えることの重要性にも気づいた。商店街は単に買い物をする場所ではなく、住民同士が気軽に会話を交わし、観光客とも自然に交流が生まれるような、地域の“たまり場”としての役割を担うことができる。買物公園で見られた、子どもが雪遊びをし、住民が散歩を楽しむ光景は、商店街が生活の一部として機能していることを示していた。

山岡氏へのインタビューを通して、今後の銀座通り商店街の活動に向けた具体的な方向性も見えてきた。特に、Google ビジネスプロフィールの情報を正確に整えること

は、すぐに取り組めるうえに非常に重要な基盤整備である。利用者が店を訪れたいと思っても、インターネット検索で情報が出てこなければ来訪にはつながらない。イベントを成功させるためにも、まずは商店街全体の情報発信力を高める必要があると感じた。さらに、商店街運営の担い手が中高年層に偏りがちな現状を踏まえると、学生が運営委員の一員として参画し、若い視点やアイデアを取り入れることも有効だと考える。幅広い世代が関わることで、商店街の活動はより柔軟で持続的なものになるだろう。また、商店街の店舗側の意見を反映できる仕組みを整え、イベントのターゲット層を明確にすることも、効果的な企画づくりに欠かせない。

　今回、初めてフィールドワークを経験し、実際の事例に触れたことで、「活性化とは何か」という問いに対する輪郭が少し見えてきた。私自身が重視したいのは、やはり“居場所としての商店街”である。買物公園と銀座通り商店街には共通点も多く、買物公園の取り組みを参考にしながら、銀座通り商店街だからこそ実現できる企画を模索していきたい。特に、食べマルシェのようなイベントは、地域の魅力を発信しつつ多様な世代を巻き込める可能性があり、ぜひ挑戦してみたいと感じている。

【参考文献】

旭川平和通買物公園公式サイト https://www.kaimonokouen.com/

(最終閲覧 2026/02/25)

旭川平和通買物公園 50 周年実行委員会『買物公園 50 周年報告書』

https://50th.kaimonokouen.com/wp-content/uploads/2022/05/kaimonokouen-50th-report.pdf(最終閲覧 2026/02/25)

旭川市役所『旭川市：買物公園について』

https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/kurashi/364/365/368/d075167.html

(最終閲覧 2026/02/25)